

## 会 議 録

会議名称	第2回伊那市文化財保存活用地域計画作成協議会	
日 時	令和5年6月9日（金）午後3時55分～午後5時25分	
場 所	伊那市役所 1階 101会議室	
出席者	協議会委員	会 長 副会長 委 員：7名、（欠席：1名）
	アドバイザー	長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課 文化財係 指導主事1名
	事務局	教育長 教育次長、 生涯学習課 課長 文化財係 係長、 係員3名
議 題	下記のとおり	
議 事 内 容		
<p><b>1 開会（15：55）司会進行：課長</b></p> <p><b>2 あいさつ</b>            教育長あいさつ            新委員自己紹介            アドバイザー長野県教育委員会文化財・生涯学習課職員自己紹介            異動職員自己紹介</p> <p><b>3 会議事項（進行：会長）</b>            （1）伊那市文化財保存活用地域計画（案）の検討について（説明：係長）            &lt;協議項目&gt;                ○第5章 文化財の保存・活用に関する目標について（106ページ）                    ・基本目標の検討                ○第6章 文化財の保存・活用に関する課題・方針について（107～116ページ）                    ・課題について                    ・基本方針および具体的な取り組みについて</p> <p>会長：冊子 P106、P107～P116 この辺の表現、考え等について中心に意見をいただきたい。P106 文化財保存活用に関する目標について資料を見て、どういう方面からというふうに細分化せずに、印象でも結構なのでご意見や考え等ありましたら出してほしい。基本的な活用に関する目標という辺りに P106 記述してありますが。第5章、第6章の活用に関する課題方針も関連しますので、ご意見があれば出してください。</p> <p>県教委：P106の三行目、『「地域の良さ」、「地域らしさ」を見つめ直す』という言葉</p>		

が出てきます。基本目標の中に出てくる『自然豊かな伊那市で生まれた歴史文化』というところが地域の良さ、地域らしさを含んでいるということでよろしいでしょうか。地域計画ですので、『地域』が前面に出てくるといいかなと思います。

会長：地域の良さ、地域らしさということが、自然豊かな伊那市で生まれた歴史文化という解釈でよろしいですか。

係長：まさにおっしゃっていただいた通りです。

会長：他にはどうでしょう。

委員：第6章文化財保存活用の課題というところで、縦に読んでみると「…明確化されていない」、次が「…わたる保存」、次が「…活用されていない」、この文化財保存・活用の課題で、文化財の保存というのが一括りで、文化財の活用の課題が一括りで考えるのかなと。そういう表現だと、「活かす」のところの将来にわたる保存で切ってもいいのだと思うのですが、上の課題のような形で読み取ると、「活かす」の部分は「…保存が十分でない」というものの方がどうかと。そうでなければ、「知る」の部分を「歴史文化資源の明確化」で切る。そこらへんはどうなんでしょう。先ほど教育長が言葉の使い方云々ということを言われたので発言しました。

係長：おっしゃる通りだと思いますので、その辺の表現については、参考に修正させていただきたいと思います。「知る」と「守る」どちらか統一した表現で訂正させていただきます。

委員：活用のところで、発信することが活用に繋がっていくというようなことがだいぶ言われているのかなと思った。発信も大事だと思うのですが、伊那市の歴史的な文化財のところに行ってみても、整備がされていない。具体的に、高遠城址公園あたりは、お殿様の住んでいたところなのであんなに草が生えていないとは思うのだが、兵どもが夢のあとみたいな感じの公園になっている。せっかく発信して行ってみても、居心地が悪い。自然豊かだと言ってしまうえばそれまでだか、色々なところに行ってみても、うっとうしさとか、草が多かったり、木が生い茂ったり、整備されていない点が目に付くので、文化財の整備というものが活用の中に入ってくるといいかなと思いました。

会長：発信するには、それに耐えられるような整備にもっと力を入れるべきではないか、あるいは表現の中でもそういった表現を取り入れていく必要があるのではないかということだと思います。

今日も午前中いーなガイドの会の総会があって、さくら祭りの話し合い、反省が出てきた。その中で、同じようなことが出ていて、看板がもう少し整備されているべきではないか。最近、桜が終わってしまったところに草が非常に生えている。伊那公園の球場を整備している方々に、高遠公園に草刈りをしてもらったらどうかと。桜守が3人いるということだが、常時2人しかいない。もっと市の中で連携をうまくして、高遠公園の草刈りも伊那の人たちに助けてもらって、私のテリトリーじゃないからと公園の草刈りをやってはいけないということはないのだから、そういうこともやるべきではないかという意見も出ていた。整備、というものは確かに、文

化財はたくさんあるが、果たしてそれを発信して、来てくださいと大手を広げて言えるような環境になっているかというところ、頭をかしげざるを得ないところがある。そういうところの見直し、きちっとできるような力を入れていく表現、実施、そのように結びついていくような形で検討してもらいたい。

委員：高遠石工研究センターから、訂正とかではなく全体の感想を含めて。網羅なく、「守る」の中に「費用、人手、技術等が足りない」と書かれているので、大きな課題だと思うが、私どもは3年程前から、一つはガイド養成をやってきていて、漸く6人ほど高遠石工の案内を地元でできる人、しかも一人は英語でできる人を育ててきた。そういう中で今一番の課題は、中尾歌舞伎さんが横に来ているが、無形なものを含めて、今アーカイブしておかないと、なかなか先にいってアーカイブできないということ。石工のものでもだいぶ風化が進んでいるものがある。この中で、私的に言いますと、特にアーカイブをどうやっていくかが、今後10年ほどの大きな課題だと思っている。一つは紙媒体だけではなく、デジタルアーカイブということもできているのでいいのだが、写真と映像を使うということ、有機的に、例えば中村不折という人がいるが、どんな人で、どんな生い立ちで、どんな作品を持っていて、一つ一つの作品はどういうところを見ればいいのかというように、例えば映像化してやさしく物語にして、学校で見えていただく。そこまで考えてアーカイブというものが今後必要だと思う。そうしたアーカイブをどう利用するかということも、少ない費用の中では、整備も大事ですが、そうしてアーカイブして伝えていくことも大きな課題になると思うので、その辺の表現に写真や映像とか、デジタルアーカイブに含まれるのでいいとは思いますが、その辺も少し心に置いて進めてもらいたい。それからアーキビスト、伝える人、とても市役所の中だけでは無理だと思う。文化の場合は草の根で、いかに市民とバックアップができるかということになる。そうした芽を持った人をどうやって育てたり、守ったり、発掘していくかが大きな課題となる。その点を含めて感じた点を述べさせていただいた。

教育長：委員さん、その他の大事なお話をしてくださって、例えば、ガイドを6人育ててこられたという、そういう取り組みをしゃべってほしい。全体の構想の中でデジタルアーカイブという言葉は出ているが、今ここでは分からない。そういうのに肉付けをもっていくには、実際に話をうかがっていて、そういえば、ふきのとうの会の皆さんは、来た人を案内しながら語り部的な役割を果たしていると言えると思う。例えば、ふきのとうの会皆さんが人数的に大きくなったりすると、それは高遠エリアの文化的な今ここに残っている様々な品々について、啓発的に語り掛けをしてくださる方たちとも言えるわけじゃないですか。少し、そういうような方たちに枠を広げていくんだみたいな、今、大事な着眼となっているので、もう少ししゃべっていただきたい。

委員：伊那市の中でも特に高遠というところは宝の宝庫で、石工だけではなくて様々な後世に伝えたいものがあるのですが、一つはややほっとかれっぱなしで、先ほどの委員からあったように、外から来た場合でも残念な状況が見受けられるのです

が、そういう中で、石仏は比較的少しブームもあり、大切にされていたり、花も手向けられたり少しずつ出てきているが、「GO TO 石仏」という講座をこれまでに20回くらいやったのですが、ガイド、観音様コース、お地蔵様コースというのを設定し、5回来ると缶で作った景品を大きなのをあげますよ、スタンプを5回押して全て受講してくださいねということで、5回受講した人にはあるステージを与えていくということをやったので、最初40人くらいずっと参加したのですが、伊那市の観光局の方々が一生懸命やってくれて、特に芽の出た、私がいなくても建福寺でも全て語れるという人が6~7人できた。そこでは、テストで案内してもらったり、そういうことも繰り返してやってきました。最終的には、昨年高遠小学校の5、6年生をその5、6人が高遠町内を案内するという取り組みもやりまして、県外の石仏ウォークなんかでも、その方たちに主要なところを案内して、わかりやすい説明をしていただくということもできました。それには、高遠のものだけではなく、近隣の上伊那の各地に行って高遠石工の神髄ともいえる貞治のものをたくさん見てもらったり、現場に行くだけでなく座学で徹底的に勉強していただいたり、そういうことを繰り返して、今年は最終的に主な6人にプラスしてもう5、6人くらいの有望な人たちを、高遠石工の名作が残っているところに行ってもらい、総合的な高遠石工ガイドになってもらう取り組みをやってきて、漸く身になってきた感じ。それには、一つは、地元の人がそれを覚えると強い愛情があるので、深く案内できる人になる。私なんかは伊那市ですが、例えば高遠の塩供なら、塩供で生まれた人が、塩供周辺のことを案内できるようになると本当にいいなと思っていて、そのうち、今言った有望な人のほとんどは地元の人で、私なんかよりも陰で勉強するような人も出てきまして、そういう案内ができるような。機会があればと思って、『建福寺宝物図録』、建福寺の和尚が晋山式の前に命がけで作ったというのですが、実は、建福寺は宝の山で、皆さんご承知の国の重要文化財もあるのですが、未指定どころか誰も見ていないこうしたすばらしいものが100点、200点以上蔵の中にある。文化庁の数人以外は一回も誰も見たことがないというものを、スタジオに持ち込んで全て撮影したもののなのですが、例えば、宝物館みたいなものがある、世界から人が呼べるものが高遠の中にあるのですが、未指定どころか誰も見ていないというもの。これも高遠石工を調べている中で、住職がこういうものがあるが、見ていないものが100箱くらい埃をかぶって蔵の中にあるとおっしゃっている。今まで俺たちは何をやってたのだろうと。素晴らしいこういうものもあるので、力を合わせて発掘していきたいなと思っています。

会長：それに関連した話があれば。中尾歌舞伎さんあたりはどうですか。創造館で特別展をやって、具体的にこういうものがあつたのだなとびっくりしたのですが。

委員：歴史といってもあまり古いものはないのですが、江戸時代から現在までの流れを企画展という形でやらせていただいています。そういうことで、私たちのような田舎芝居を知っていただく良い機会になっているので、公演だけでなくそういうことも中尾座に来ていらっしゃる方、最近子ども達も来てくれているが、勉強会をや

って、公民館の繋がりです。今年もこれから伊那公民館も来ていただけるようになってるので、講座でそういう歴史を説明する。いまおっしゃったように、説明する人が大事だと思うので、そうした人を作っているという状態です。

会長：まず、知るという原点だろうかと思います。そういう部分でも、もっともっと力を入れて、我々皆さんに知っていただくという点に力をいれなくてはいけないかなと思います。

委員：東春近の老松場古墳の整備委員会で、今年で10年目の活動に入ったのですが、今お話を色々聞いている中でだいぶ違うなというのは、老松場の古墳公園をターゲットというのではなく、老松場古墳公園に人を呼びたい、きれいにしておきたい、そのためには何が必要かという、きれいにする整備作業が非常に重要です。それで10年間になるが、当初は国の森林山村多面的機能交付金というのを6年間活用し、その後伊那市の共同まちづくり交付金で取組むことで、先日第1回作業をしたのですが、どうしても10年という年数が、作業する上では年齢が10歳年取ったこととなりますので、若い人たちを呼び込みたいのですが、作業するために、作業も1回ではなく、昨年では延べ30日くらい、半日作業ですが、出て草を刈ったり、危ない木を倒したりが主なことになる。古墳公園としてきれいにして、元々のきっかけが、東春近保育園が建て替えになり、老松場古墳公園は保育園のすぐ上の段にあり、そこに遊びに行くようにできないかという保育園からの問いかけがあり、それで、地元中組の有志が集まって整備しようということで、古墳の周りに遊歩道を作って、周辺の草刈りをして子ども達が来られるようにということで始めたのですが、どうしても今は年齢の問題と、お金も1日2日の作業であればボランティアで参加してくれる方もいるかと思うが、30日くらいになるとどうしても資金が非常に重要になる。たくさんのお金が払えなくても、ちょっとした費用は担保するというで活動しているが、どうしても続けていかなくては元の本阿弥で、作業している子ども達が上がってきて、たまには一緒に話をしたり、この頃は保育園の先生方も老松場のことを説明してほしいということで、説明会の要請があったりします。当初は国の良い仕組みで「教育研修プログラム」を活用でき、1回5万円で年12回やってよい話があり、その時に小学校・保育園、我々を含め、老松場に呼び込んで色々なことをやりました。キノコのコマ打ち体験をしたり、木を植えたり、近くに竹林もありますので、竹を使った話とか。今非常に良かったと思うのは、東春近小学校は老松場を題材にした劇を自分たちで考えて、先日パート2の上映がありましたが、子ども達の方が先頭へ立っていけるような雰囲気が出てきたのかなと。先ほども言いました通り、手を抜いてしまうとまた元に戻ってしまうので、どうしようかなというのが最大の課題です。

会長：どこの文化財も抱えている共通の問題だと思いますが、その辺もこの計画書の中で文字化できるものは文字化して、維持管理の面、活用の面になりますか、進むような形の配慮をいただきたいと思う。

委員：私も高遠町の図書館、歴史博物館の古文書のボランティアに関わらせていただ

いているのですが、古文書があるからそういうことができる。なかなか難しいことなので、一日で何点とあまり進みはないのですが、それ以前に、「知り、活かし、守る」と、古文書の場合は、どうしても世代の交代によって今まで大事にされていたものが、どんどん出されてしまう。普通の人が見れば汚いゴミという形で、どんどん出されてしまったり、土蔵の中に大事に置いてあったものをそのまま壊してしまう。そういうような形がいっぱい見受けられるので、「知る、活かす、守る」の順番を逆にして、古文書は「守る」方、収集を先に進めていってもらいたいと感じています。

委員：旧伊那部宿ですが、いま出た古文書の件で、引き継いでから28年経つが、その間、虫干しを一度も出来ないで、昨年計画を立てたが、結局コロナ禍で実現できなかった。先送り、先送りで28年過ぎ去って心配しているところ。古文書に解説については専門家が主になって解説をしていただいたものがあるが、これらについても長い文章なので字が細かくてなかなか私どもの眼鏡では読み切れない、そういう代物なのですが、ここら辺の管理、活用の仕方は専門家でないと、虫干しも私どもの範囲ではなかなか難しくてできない。ここら辺も悩みの種。現在は伊那部の常会を含め、そういう向きの皆さん方に率先して協力をさせていただき音頭をとり、活動をしている。ここにある「守る」という項目の中で「文化財の老朽化に対応できない」、対応できないということではないが、なかなか有形文化財みたいなものは、人が往来しないと建物そのものは老朽化してしまう。老朽化率が早くなる。どうやって人寄せをするか。それにはイベントとか色々な活用方法はあると思うが、活用する方法にも色々な考え方の人がいて、どれをとってみても正しいので、どれをOKするかということになるが、非常に非難の対象にもなったり、強引に押し進める計画も多々ある。旧伊那部宿そのものが、他村、伊那市以外の宮田村とかお隣の村の皆さん方とコミュニケーションを取っていくと、色々な面でお互い勉強になることがある。昨今は高遠藩から譲ってもらった兜がある。これは伊那市の有形文化財という保存物ではなく、私どもの伊那部宿を考える会の中だけのものであるが、かなり立派なものである。きちっとした製本で、個人の宮田の方が3日間かけて、調べ上げてくれた。伊那部宿そのものの中が、亡くなったり、少子化によって空き家にばかりになり、とにかく草の処理が大変。やはり考える会だけの範囲では動ききれない。そういうことで、常会とタイアップするとしかないということで、現在協力しあってやっているのが現状です。こういった有形文化財を守っていくための防火に対する面で、鍵を施錠して帰るといいう形でも、たまに忘れていってしまったり、電源の一部を消し忘れてしまったりということで、夜に電話が掛かってきて、「旧井澤家住宅の電気がついているが今日何かやっていますか？」とそういうような恥ずかしい話ですが、とにかく油断ができない。そういうことで、現在はワンタッチで全体の電源が切れるような形に改良したり、工夫をしている。人寄せの件について、少子高齢化などの減少で、特に伊那部宿を考える会でも全く同じで、老朽化じゃなくて、若い人はいないものですから、私がちょうど会長を受け持ってから4

期、今年で10年目になる。早く引退しなくてはいけないが、今回は勇退ということで最後のお勤めにさせてもらいたいということで折れたところが、たまたま60代の副会長や事務局長が名乗ってくれたのでホッとしている。これから後世にこういった自在の歴史を連ねていく、残していくということに関する勉強はほとんどされていないものですから、これらの講師を教育委員会の皆さま方をお願いしたり、専門家をお願いするような形をとらないと、自分たち自身の会の中では限界がある。また順次そういったことの計画を組み入れていこうと考えているが、検討してもらいたいと思う。

もうひとつ、旧井澤家住宅の中に舞台というものができている。有形文化財である以上は、舞台なんていうものがあるものはあるわけがない。復元工事をやったときに、設計者と地元の我々が、やっぱり人出がないと建物がだめになってしまう。年3、4回は一つの行事をやって人集めするしかない。そのためにはステージとかそういったものが必要になるということで、そういうような形にある空間を利用して作ってもらった。普段は馬屋ということでカモフラージュして、本来は舞台。パンフレットには馬屋(舞台)ということにしてあるのですが、これにも会員の中で色々批判を受けている。ですが、今まで旧井澤家住宅が今年で17年目になりますが、17年間で行事のイベントがあったために非常に住宅の内部が日常生活しているような雰囲気では保たれている。ただ、住宅に見学に来る観覧者だけでいうとゼロ。現在観覧者についての分析をすると、県外、外国人、こういう方がいろいろな情報を得て立ち寄っていただいているというのが実情です。そこら辺のところ、いよいよ私も一つの切れ目の時がきているので、市の方にも協力をぜひぜひお願いしたいと思います。

会長：伊那部宿の現状の説明をいただきました。各文化施設が抱えている問題だろうと思いますが、保存活用に関係する部分だと思います。そんなことも参考にして事務局でお願いしたい。観光の関係でご意見がありましたら。

副会長：各委員の皆さまからの話をうかがって、またこの厚い資料を見させていただいて、改めてこの地域は文化的な素晴らしい資源が多くあるんだなということを感じましたし、先人が残してくれた暮らしの中で、生活営みの中で、気候に合わせた、地質に合わせた様々な知恵の中から資源が生まれたのだと改めて感じました。ここで、観光といわず、伊那谷の内部環境の主な強みと主な課題を整理して申し上げたいと思います。この内部環境の主な強みですが、伊那は二つのアルプスを始めとした豊かな自然がある。先人が受け継いだ素晴らしい歴史・風土・文化・暮らしがある。皆さんが言われた通りです。ただ課題として、やはりブランド力の弱さがある。そして資源、観光に対する住んでる住民の皆さんの認知の低さもあるのではないかと考えています。後は、日本中どこでもそうですが、著しい人口減少、少子高齢化が進んでいる。その時にやはり、守るといった時に、継承する、人材育成、教育は非常にポイントが高いのではないかと考えていますし、若い人がガイドをやったり、土地を愛して伝えていくというような後継者も作っていく必要があると思いま

す。一つ一つの資源に、それぞれに広域的なストーリーがありますので、ハードウェア、ソフトウェア色々ありますが、縦軸横軸を整理しながら、この推進目標「知る、活かす、守る、継承」というものを事業に落とし込んでいただければいいかなと感じました。

会長：ブランド力がどこまであるか、まず知ることが原点かと思います。あと確かにいかに守るかということになると、やはり人ということになるかと思いますが。他にこのことは申し上げておきたいということがあればお願いしたいです。なければ事務局にお返しします。

#### 4 その他

係長：7章以降の部分、措置の一覧についての意見、全体を通しての意見を、紙・メール等で今月末 6/30（金）までにお寄せいただければと思います。今後の段取りは、庁内関係部局との内容についての共有を計る中で、必要な意見をいただく。今回いただいた意見と今後お寄せいただいた意見をまとめて、案自体の内容を精査、整理させていただいて、不足する分については書き込みをして、改めて皆さまにご協議いただく機会を設けたいと思っています。次回、8/17（木）で会議を設定していきたいと思いますので、ご案内をさせていただきますが、ご承知おきいただければと思います。繰り返しとなりますが、30日までにご意見をお寄せいただければと思いますので、よろしくをお願いします。

事務局：もう一つ考えていただきたいことがあり、7章措置についてと9章重点区域の設定を考えていただきたい。P159 重点区域の設定に関する保存活用を考えているという章ですが、こちらは文化庁の地域計画の章立てにないというか、伊那市独自のものになってきますので、先日の文化庁協議でもこれを作ることについてお褒めをいただいたのですが、いま伊那地域、高遠町地域、長谷地域の重点地域を事務局の案を書かせていただいています。

（P163 2 保存活用重点区域の設定と保存・活用の方針の説明）

前のストーリーとも異なり、広い地域という中での保存活用、こういったものが考えられるのではないかということをお出しいただければと思っています。7章と合わせて、こんな地域があるんだなということをお出しいただければと思います。

会長：それこそ伊那部宿は何十年も続いているのだから、そういう重点地域に入れたらどうですかね。それは参考にしてください。

課長：長時間にわたりご協議をいただきありがとうございました。これをもちまして第2回作成協議会を閉じたいと思います。ありがとうございました。

#### 5 閉会（17：25）課長